

解答

- 問1 いずれも、城を中心として町がつくられている。城を堀で囲み、その外側に武家地と町人地が明確に分けられている。武家地や町人地も、堀で囲まれている。また、町の周辺部に寺社地が配置されている。
- 問2 (あ) 山科 イ 石山 エ
(い) 淀川
- 問3 (あ) 延暦寺
(い) 親鸞・法然・一遍などから1人
- 問4 能
- 問5 織田信長
- 問6 寺院勢力が一揆をおこすことのないように、近くに置いて監視しやすくするため。また、多くの信者が集まってきて町の人口が増えるとともに、地方からも信者がお参りに来ることなどによって、町の経済力が高まるようにするため。
- 問7 江戸幕府はキリスト教をきびしく禁じ、人々がいずれかの寺院の檀家となる寺請制度を設けた。このため、寺院は、檀家を通じて安定した収入を得られるようになった。また、人々を管理する役所のような役割をもつようになり、仏教を広めるという本来の役割がうすめられていったから。
- 問8 明治政府は、天皇を中心とした中央集権国家をつくるために、神道を国の宗教にしようとしたから。
- 問9 (例) 城下町が生まれたころには、人々の生活の中心に宗教があった。宗教は人々の不安を解消して暮らしを守る存在であるとともに、政治権力とも結びつくなど、人々の生活に大きな影響をあたえていた。それにくらべると、現代の日本では、日常生活において宗教を強く意識している人はあまり多くない。政治や社会に対しても、経済的な利益を求める傾向が強くなっている。現代社会でも、宗教を生活の大きな柱としている国や人々があることを考えると、時代によって、また国や地域によって、宗教の位置づけは大きく異なることがわかる。

解説

- 問1 資料から読み取れることをしっかりと書きましょう。どちらの城下町も町の中心には城があり、その城を守るための堀が設けられています。また、城の外側に、武家地と町人地があり、身分によって居住地が分けられていること、寺社地が城下町の一面に集められていることなどがわかります。
- 問3 (あ) 延暦寺は平安京からみて北東の方角にあります。平安時代、白河上皇などが仏教を厚く信仰したため、寺院の勢力は強まりました。延暦寺などの大寺院からは多くの僧兵が朝廷などにおしかけ、寺の要求をつきつけました。
- (い) 平安時代末期から続く戦乱やききんなどで不安を強めていた人々は、心のよりどころを仏教に求めました。このような願いにこたえて、新しい仏教がうまれました。
- 問5 一向宗の総本山であった石山本願寺は、織田信長によって攻められました。そして、その跡地には豊臣秀吉によって大阪城が築かれました。
- 問6 本文にヒントがあります。「信者の激しい出入によって、都の町がますます拡大し…」や「将来におけるなんらかの不穏な動きを抑制する…」という部分から、寺があることで町の経済を活性化することや寺院勢力が反乱をおこさないように監視するということが理由として読み取れます。
- 問7 幕府が実施した寺請制度によって、その寺に所属する檀家が寺の運営に必要なお金をおさめることになり、寺院は安定した収入を確保できるようになりました。また、結婚や転居、旅行で移動するときには、寺院が証明書を発行するなど、人々を管理する役割を果たすようになっていました。そのため、僧は仏教の教えを広めていくことよりも、このような仕事をこなしていくことを重視するようになったのです。
- 問8 日本では奈良時代ごろから、日本古来の神は仏教の仏が姿を変えたものとされ、神と仏の区別がなくなっていました。明治時代の初め、政府は神と仏をはっきり分けてまつる命令を出しました。そして、天皇は日本古来の神々の子孫とされました。この命令は、神道をもとにして天皇の権威を高め、国をおさめていこうという考えのもとで出されたものでした。この命令が出されると、各地で寺院の建物や仏像をこわす暴動もおこりました。
- 問9 城下町が生まれた当時は、「宗教」と「政治や社会」との結びつきが強かったといえます。宗教は、人々の生活の中心であったため、権力者によって弾圧されたり、利用されたりすることもありました。現在の日本では日常生活の中で宗教を意識することは少なくなっています。しかし、イスラム教が信仰されている国などでは、宗教と政治や社会が現在でも深く結びついています。